

## 書くための指針として(内規)

制定：2010年3月20日  
最終改正：2014年3月3日

基本的には引用の方法や引用文献の書式は不足なく情報が与えられていて、かつ一貫していれば、どのようなスタイルをとっていても良いものではありません。しかしながら、1冊の論文雑誌にまとめるに当たってはその中でも統一が図られることが望ましいことは言うまでもありません。また、特に剽窃を避けるという目的で、引用はきちんとすべきであるという意見もあります。引用は必ず「投稿論文の書式」をご参照の上、注意して行っていただきたく、お願い致します。

以下、失礼とは承知しておりますが、細かいことを列挙します。なお、以下のことはほとんどが特記すべきことではありませんので、異論のある方はご容赦ください。

1. 構成は、(1) 序(introduction/justification)、(2) 本論(content)、(3) 結論(conclusion)、(4) 注(notes)、(5) 参照文献(references)の順とし、各構成要素は後述のパラグラフ・ライティングを守る。特に、**justification** はしっかりと、かつ簡潔に行うこと。また、本文は章に分けたり、段落で整理したりして判りやすくまとめること。
2. 注は本文の関連情報などを、本文では言及不足ではあるが、流れを妨げないために別所で補いたいときに用いる。
3. パラグラフ・ライティングの徹底。パラグラフは **topic sentence** → **reasoning** → **examples and/or proofs** → **conclusion** の手順を追ってきちんと書く。Conclusion には、できれば当該のテーマの今後の見通しも含めた位置づけを入れること。なお、各パラグラフは最後まで議論を尽くして、次のパラグラフに移ること。
4. ジャンルを意識して書くこと。求められるのが論文スタイルか、一般向けの情報提示を主体としたものか、評伝などの書籍用かなどをしっかりと把握して展開することが望ましい。

### 附則

この内規は2010年4月1日から運用する。

### 附則 (2010年4月15日)

この内規は2010年5月1日から運用し、『日本英語英文学』第20号(記念出版物)より適用する。

### 附則 (2011年4月1日)

この内規は2011年4月1日から運用し、『日本英語英文学』第21号より適用する。

### 附則 (2012年3月21日)

この内規は2012年4月1日から運用し、『日本英語英文学』第22号より適用する。

### 附則 (2014年3月3日)

この内規は2014年4月1日から運用し、『日本英語英文学』第24号より適用する。

この内規は2015年3月16日「投稿論文の書式、注、引用文献について補足(内規)」(英米文学論文用)の制定にあたり、事務局長の責に於いて微改した。

(了)